



「弁当の日」推進を宣言した「健康かごしま21」セミナーin徳之島 (シンポジウム)

健康かごしま21 in 徳之島

「弁当の日」推進宣言も

親子から食育の大切さ再認識

【徳之島】今年度「健康かごしま21」推進セミナーin徳之島

（徳之島保健所主催）が9日、「食を通じて生きる力をつける」をテーマに徳之島町文化会館であった。「長寿・子宝の島」との半面、生活習慣面とも絡む若い世代問題も重視。子どもたちが作る「弁当の日」提唱者の竹下和男氏（元香川県綾上中学校長）ら2氏の基調講演や、食環境ジャーナリスト金丸弘美氏らを迎えたシンポジウムを通じて、食育の大切さを再認識し合った。

関係機関・団体の代表や子育て中の親など約610人が参加し

コーディネーターは西日本新聞社の佐藤弘編集委員が担当。まず地元病院管理栄養士の永長真弓さんとNPO

法人代表で助産師の野中涼子さんが同島の現状について報告。「30歳以上に脳出血・脳梗塞で救急搬送される人が多い。食生活など健康の話は分かっているが、実践に結びついていないのが現状」とも提起した。

基調講演では、生きる「生教育」をテーマに講演活動している助産師・内田美智子さん（福岡県）が「『ここに生まれてよかった』と思える子に」、竹下氏が「『心の空腹感』を訴える子どもたちを救う」を演題に話した。

内田さんは「子どもたちは（親に）手をかけて欲しいと生きている。必要な時に手を掛けてもらえないと思春期を乗り越えられない」と。金丸氏は「長寿者は地域に根ざした食材を食べてきたことも分かった。地域の食材を前面に出せば日本一の島になれる」とエールを送った。

最後に町長や教育長らと交え、各校での「弁当の日」推進も宣言した。

「い」。早寝早起き・朝ごはん・弁当・本の読み聞かせ・子守唄との共通点は「（子を）気にして、手間ひまを掛けてくれる人がいること」とも強調。竹下氏は、2000年度に「弁当の日」をスタートさせた背景や「気づき・感動」などその効果を紹介し、「弁当の日を島ぐるみでやれば全国に発信できる素地がある」とも促がした。